

## 1. 巻頭言

このところ、日本の大学の世界でのランキングが低下しているという報道をよく目にしますが、この低下の原因として、日本の大学の力の低下と、発展途上国の著しい向上が挙げられます。

大学のランキングには種々の指標があります。たとえば、学生数とか、学生一人当たりの教員数、予算規模などありますが、大学の評価にもっとも客観性があるのは論文の発表数です。

そこで、「科学研究のベンチマーキング2015-論文分析でみる世界の研究活動の変化と日本の状況-2015年8月、文部科学省 科学技術・学術政策研究所」の資料で調べてみました。2013年の年データですが、G7諸国の中で人口百万当たりの論文数で比較すると日本はなんと最低になっています。カナダ1800、イギリス1700、ドイツ1200、アメリカとフランス1000、イタリア900、日本500編ぐらゐの論文数です(2013年トムソン・ロイターIn Cites)。2000年頃から、日本を除くG7国の論文数は上昇を続けていますが、日本の上昇はみられません。たしかに、日本の低調ぶりが分かります。

日本の大学のランキングの低下は何故でしょうか。私は国立大学の法人化に原因があるように思います。国立大学の法人化は2004年になされました。法人化の目的として、文科省は当初、「大学の自主性を尊重しつつ大学改革の一環とする」、「競争的環境の中で世界最高水準の大学を育成する」などと綺麗ごとを並べ立て、そして、大学の構造改革を進め、大学の人事や予算が自由になるなどと言っていました。

国立大学が法人化され10年以上経過しました。もし、上記のように大学がなっていれば、日本の大学のランキングは上昇している筈です。現実はどうでしょうか。予算や人員の削減は続き、文科系の学生は減らせといわれれば、どの大学も従わざるを得ない状態で、大学の自主性など無視されているように思います。

また、法人化によって、大学に無駄な仕事が増えています。たとえば、中期目標の設定とか認証評価制度です。このために、教職員は膨大な資料づくりのために、本来、教育や研究に振り向けられるべき時間が割かれてしまいます。現在の中期目標の設定とか認証評価制度は、まったく効果が上がっていないと思います。法人化を糊塗する、ただ形式的なものに過ぎません。もし効果があれば、日本の大学のランキングは上っている筈です。

当財団は文科省のこの大悪政に逆らって、少しでも教員の業績を増やしたいと努力しています。今後とも、ご支援・ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

2017年3月8日  
代表理事 難波 正義